

公開シンポジウム・研究集会参加記

「巡礼と救済—四国遍路と世界の巡礼」シンポジウム・研究集会に参加して

浅川 泰宏

(1) はじめに

愛媛大学の「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム・研究集会は、今年度で5回を数えるという。文化人類学、民俗学、宗教学などの立場から、主に四国遍路をフィールドとして巡礼研究に取り組んできた筆者にとって、本シンポジウム・研究集会でこれまでなされた多彩な報告は、いずれも大変に示唆深いものであった。

以下では、筆者の立場から恐縮であるが、本年度の報告について、興味・関心を持った点を中心に、簡単に感想を述べさせていただきたい。これにより、これまでの研究交流に対する御礼に代えさせていただくとともに、もし、この試みが、微力ながら研究会の発展に貢献できるのであれば、存外の幸せである。

(2) 各発表についての感想

○鈴木報告・北川報告

公開シンポジウムの両報告からは、熊野詣、西国巡礼と四国遍路をつなぐ濃密な地下水脈が透けて見えるような気がした。

現段階では近世に確立したと考えられる四国遍路に対し、熊野・西国は中世からの伝統を持つ。既に近藤喜博をはじめ、幾人かの研究者がその繋がりを指摘してきたが、今回の鈴木・北川報告は、中世に「中央」で華開いた巡礼文化の影響を、近世の四国遍路も濃厚に受けているに違いないという直感を改めて呼び起こすものである。

こうした観点から特に興味深いのは、巡礼者への施行が功德になるという接待の論理が、熊野においては仏典によって権威づけられているということ（鈴木報告）、西国開創縁起に「墮地獄回避」の信仰を読み取るべき（北川報告）、という二つの指摘である。熊野・西国と四国遍路の間に伝播の回路を仮設したとき、これらはどのように四国遍路に影響したと考え得るのであろうか。日本のマクロな巡礼文化の構造の解明へと迫る、実に刺激的な視点である。

○足立報告・山代報告

キリスト教系巡礼の歴史研究である。足立報告は古代、山代報告は中世を中心とするが、共に前後の時代とのつながりが意識されており、聴衆にとって2つの発表は自ずと接合され、理解が深められるものであったと思う。

足立報告は、女性であるエゲリアの巡礼書簡という事例の面白さもさることながら、「ランドスケープ」「心性」「景観記憶」といったキーワードが目をつけた。山代報告は、中世の教会制度のありかたや世界観などを総合的に考察しながら、「魂の純化」という〈癒し〉のテーマへと解釈する視座が印象的であった。

両報告には、巡礼が人々によって重層的に構築されるものであるという視点が貫かれている。ツーリズム

研究、文化資源論、聖なるものについての集合意識の問題など、筆者の研究領域における今日的テーマとのつながりを持つ点でも、示唆に富んだ報告であった。

○伊地知報告

近年、宗教学で盛んな、戦没者や社会的な惨事の犠牲者への慰霊研究との親和性が高く、興味深く伺った。追悼の念がどのような社会的、政治的文脈に基づいて整理され、「歴史」となり、具体的な場所と結びついて、「聖地」が構築されるのかという問いは、現代における聖地化の問題として重要なテーマである。

また人類学的見地からは、観念の共有に際して、「近代」的な学術討論などと並んで、「伝統」的なシャーマニズムが活用されるという指摘に関心を持った。

○浅井報告

生理学的知見から「歩くこと」の意義、すなわち「歩き遍路」に留まらないウォーキング一般の身体的効用が指摘された。筆者は、歩き遍路と遊歩道の散策などを同じ組上に乗せる際、それぞれのコンテキストの相違をどのように取り扱うべきかという方法論的な関心を持っていた。本報告によると、生理学的にはこれらは同等に対象化されるという。これにより、実践者たちが時に言及するような、歩き遍路ならではの特別な体験の分析は、人文系の課題となる。本報告の主旨からはやや外れるかもしれないが、巡礼研究の学際性における役割分担が明確にされた点も、有意義な点であったと思う。

○井上報告

「四国西国順拝記」「中国四国名所旧跡図」「於仏木寺接待」という、いずれも興味深い三編の資料に基づく、臨場感あふれる報告がなされた。特に「順拝記」は、遍路と病氣直しや信心との関係、女性や子供の処遇、都市と農村のまなざしの交錯、遍路の悲劇性（狼に喰われた遍路や夥しい遍路墓が醸し出す情感）など、筆者にとって興味深いテーマの宝庫であった。

また、「順拝記」の「月夜村かたうち峠の禁にさかせ河とて大河あり」（レジュメNo.2上段中頃）にある峠の名は、原本の著者による「かねうち」（鉦打）の誤記だと思われる。ついでながら申し添えておきたい。

(3) 全体的な印象と今後の展望について

全体を通して印象に残ったのは歴史学的巡礼研究の厚みである。今回の報告では、ミクロ社会学の伊地知報告、生理学の浅井報告以外は、全て歴史研究のカテゴリーに分類できよう。ここで指摘したいのは、方法論的な偏りではない。だが、特に公開シンポジウムの聴衆の多くは、現代につながる身近な四国遍路において、今回のテーマである「救済」がいかにも実現されているのだろうか、という点に最も関心を抱いていたのではないだろうか。

プロジェクト代表者の内田九州男氏は、「救済」を遍路・巡礼研究の核心的な問題と述べ、継続的な議論の必要性を指摘している。巡礼の歴史学的な救済論をいかにして現代的な関心に接続しうるのか。あるいは、熊野や西国、キリスト教系巡礼などの豊富な研究蓄積を、どのようにして四国遍路研究に還元しうるのか。今回のシンポジウムでも、鈴木報告や山代報告などでは、その問題提起がなされていたと思う。

ここ数年、秋の松山訪問が楽しみであったが、ますますその気持ちが強まったと言えよう。次回もよろしくお願い致します。